

講義 源氏と源氏以後

— 第三講・藤原定家という存在 —

第一講 「文学」と「効用」の問題

口上

- 一 孝標女における「影響」のかたち
 - 二 「文学」における「効用」の問題
 - 三 『源氏物語』の「効用」 (以上、本誌第82号)
- 第二講・紫式部と孝標女の距離
- 一 平安中期女性作家関係系図
 - 二 関係系図を読む
 - 三 「中の君」の物語 (以上、本誌84号)

本稿は、本誌の偶数号に掲載してきたが、前号86号は、

横 井 孝

昨春に『夜の寢覚』末尾欠巻部の断簡と特定できる伝後光厳院筆の物語切が出現したと、それとの関連での補足事項があったため、それに筆を費やして休載せざるをえなかつた¹⁾。

もともと本稿は、第一講にもふれたが、二〇一一年後半の半期のみ本務校外でおこなった「講義」をもととしている。その後の調査をふまえるところがないわけではないが、基本的にはその講義を保存しておきたい、という思いからの文章化なのである。「講義」であるからには、学生あるいは好学の諸氏の血肉になってほしい基礎的なことから、中核に据えており、いわゆる「論文」とは異なるもの、稿者の拠って立つところを表明するものであるから、広義には「論考」あるいは「論考の種」とでもいうべきである。

ただしかし、連載というにはあまりに気ままに本誌に掲載させていただいてることにはまちがいないので、誌面を塞ぐことの恐縮 apology と容赦 excuse を、まず申し述べておきたい。

一 『源氏物語』の場合

源氏物語千年紀の年、二〇〇八年（平成二〇）六月七日、京都文化博物館の旧館でおこなわれた記念シンポジウム「大島本源氏物語の再検討」は、本文研究という地味なテーマであったにもかかわらず、異様な盛り上がりがあった。近年の絶対的な位置を占めていた大島本の素性に照明が当てられるという前評判（事前に公表されていた佐々木孝浩の論考⁽²⁾にインパクトがあった）、意見を異にするパネリスト間での論争が期待できたこと、そして場所柄のせいでもあったのだろう。その内容は、

中古文学会関西西部会編／藤本孝一・加藤昌嘉・佐々木孝浩・加藤洋介・片桐洋一著『大島本源氏物語の再検討』（和泉書院、二〇〇九年一〇月刊）

という一冊になった。

そして、昨年（二〇一四年）一月一日、今度は佛教大学二条キャンパスでシンポジウム「源氏物語 本文研究

の可能性」が開かれた。右のシンポジウムの第二弾として、基調講演・陽明文庫長名和修^{（なわ）}「陽明文庫別本源氏物語について」

岡寫偉久子^{（おがしまい）}「鎌倉写本に見る様々な情報——主として河内本から」

加藤洋介「河内本・別本から見た定家本源氏物語」
新美哲彦^{（にいみあきひこ）}「定家本『源氏物語』の諸問題」

という顔ぶれであった。司会を稿者がうけたまわった。岡寫はフルカラー版尾州家河内本の刊行と悉皆調査の結果を踏まえての精緻な論。加藤は河内本によって定家本の欠を補いうるかとする提言。新美は、定家本における大島本と明融本^{（みょうほうほん）}（東海大学蔵）との間の「距離」についての考察であった。

各氏の発表は最新の本文研究の状況、最前線をなすものであったが、司会が非力で要領を得なかったこともあり、かつ二〇〇八年の折のような話題の焦点化が得られなかったこともあり、やや盛り上がり欠ける感があった。

ただし、記念シンポジウム「大島本源氏物語の再検討」で、大島本のみならず「青表紙本」なるものへの問い直しが必要になるようになった結果、今回の各氏の発表題目にも顕在化しているように、直接「青表紙本」の概念が相対化され、「定家本」そのものの闡明へと向き合える環境が示された

のではなかったか。

今回の各氏の発表がおわった後の質疑応答のなかで、前回司会としてシンポジウムを仕切った片桐洋一が、近年『源氏物語』の「定家本」の見直しが過激になり、むしろ貶められ過ぎていてのではないか、という疑義を呈した。もとより現状は『大成』のこれまでの「権威」への反動という一面はなきにしもあらずだろうが、『源氏物語』の伝本としてさかのぼりうる鎌倉期という段階で、名和の熟知する別本や岡寫の調査による河内本などと並列し比較したところで見えてくるものを、まず模索してゆくべきなのではなからうか。そのうえで、定家の果たした役割を評価してゆくことになるのだと思うのである。

*

「源氏と源氏以後」という本講の立場から『源氏物語』本文状況がどのように見えるだろうか。

定家本と河内本の差異について、早い時期から話題にされていた、名高い場面から引いてみよう。明石の巻、光源氏がはじめて明石の君の住まいを訪れる場面。

つくれるさま木ぶかく、いたき所^{さや}さまにて、見どころあるすまゐなり。海づらはいかめしうおもしろく、これ心ばそうすみたるさま、こゝに居ておもひのこす事はあらじとすらんとおほしやらるゝに、物あはれな

り。三まいだうちかくて、かねの声、奈の風にひゞきあひて、ものがなしう、岩においたる松のねざしも、心ばへあるさまなり。せんざいどもに虫の声をつくしたり。こゝ、かしこのありさまなど御らんず。むすめすませたるかたは、心ことにみがきて、月いれたるまきのとぐち、けしき^{せせせせ}ばかりをしあけたり。

(二六ウ⑧～二七オ③ 四六四頁)

右の引用末文について、今川了俊『師説自見集』(応永一五年(一四〇八)成立)所収「源氏之雜説抄」が「青表紙説」の本文であるとし、「定家卿云、此言源氏一面^{おもしき}白言云々」と紹介したことから、河内本との差異をめぐって周知の一文となった。右に引用した一節は、末文のあたり、河内本内部では異同はほとんどなく、尾州家本ではこのようになっている。

……こゝ、かしこのありさまなど御覧ず。むすめすませたるかたは、こゝろことにみがきて、月いれたるまきのとぐち、けしき^{せせせせ}ことをしあけたり。(二三オ③～⑤)

この「青表紙説」と河内本の差異を『花鳥余情』(文明四年(一四七二)初度本成立)で一条兼良^{かねら}は「両説ともに其^{その}謂^{いは}なきにあらず。人の所好^{このむとろ}にしたがふべし」といい、優柔不断の判断停止にも見えるせいか、室町期の注釈には指示する見解が見えず、定家の名声の向上とともに「青表

紙説」＝定家本本文が圧倒してゆくことになる。伊井春樹はこの間の事情を、

肖柏の時代になると読みの深まりにともない、二者択一による解釈を呈示して、判断を避ける姿勢は許されなくなった。そこで求められた基準というのが、鑑賞批評の詠みによる判断であった。「けしきことに」よりも「けしきばかり」の方が、この場面を鑑賞する上においては「殊勝」であり「艶」であるとの立場から、青表紙本を是としていくのである。⁽³⁾

と解説する。これに対して、稿者は旧稿で次のようにコメント comment したことがある。

伊井がここで指摘するのは、「月いれたる……」の文脈で、「けしきばかり」か「けしきことに」かのどちらかが本文批判として正しい、ということではなく、兼良の場合は兼良の批評的意識のもとに「両説ともに其謂なきにあらず」と判じたがゆえに「人の所好にしたがふべし」という結果に到着したのであり、肖柏や実隆は彼らの読解の結果として「けしきばかりをし明たると書て、尤艶」と評したので、としたのに過ぎない。近代国文学的方法のひとつとして導入された本文批判が注釈世界で展開されているわけではないことは一目瞭然のはずだからである。⁽⁴⁾

了俊・兼良の時代に現実として「けしきばかり」「けしきことに」両様の本文があり、本文批判という方法を持たない兼良には、その現実を受け入れる他なかった。了俊や室町期の注釈は、藤原定家という存在——權威——に依拠したのであり、それが彼らの「方法」だった。

この明石の巻の一節は、注釈史のなかで「青表紙説」と河内本（了俊のいう「紫明抄の説」）とがするどく対立すると見られてきた実例であるが、論をつづめていえば、結局「けしき」はかり」「けしき」ことに」という微細な差異の問題でしかないように見える。

これも旧稿であつかつた例ではあるが、夢の浮橋の巻末ちかく、薰の意を受けた小君が小野の里を訪れたものの、横川の僧都の妹尼がとりなしても浮舟はかたくなに会おうとしない。あきらめた尼が小君にその事情を伝える場面、「かくなん」とうつしかたれど、物ものたまはねば、かひなくて、「たゞかくおほつかなき御ありさまをきこえさせ給べきなんめり。雲のはるかにへだ、らぬほどにも侍めるを、山風ふくとも、又もかならずたちよらせ給なんかし」といへば……（二〇七〇頁）とあるところ、諸本の状況を細かく見れば、つぎのようなものだった（略号については注（5）論参照）。

イ、やまかせふくとも——池・横・柳・陽・平・肖

口、山かせふくとも——大

ハ、山風ふくとも——明・首・湖

二、山風吹とも——穗

ホ、山かせふくとも——幽

へ、やまかせふくとも——三

ト、補入——勝

チ、山ふかくとも——公・(御・七・尾・前・大・鳳

・吉・耕)・(国・麦・阿)

リ、山ふかくとも——(岩)

又、山風にゆくとも——〔宮〕

ル、ナシ——〔保〕

錯綜しているかに見えるが、基本的に「山風ふくとも」とする定家本諸本、「山ふかくとも」とする河内本・別本の諸本とおおまかに分類することができるに過ぎない。しかも「山かせ」「山ふかく」を見れば推察できるように、この二つとも近接した様態からの転化と見なすことができるように思われる。——とすれば、対立するかに見えていた明石の巻の「(けしき)はかり」「(けしき)ことに」の場合も、字母の近似などの本文転化を考えてよいのかもしれない。

それでは、「此言源氏一の面白言」と評したといわれている(文献で確認できるわけではない)「青表紙説」の本

文とはどのような性格のものであったのか。好例とみられていた明石・夢の浮橋の両巻の例を除外してみよう。

周知の桐壺の巻の一節、帝による更衣回想の場面——もはや手垢がつき過ぎた感のある場面ではあるが、初学の向きには有効な実例である。

〔定家本(＝明融本)の本文〕

ゑにかける楊貴妃のかたちはいみじきゑしといへとも
ふてかきりありければいとほひすくなし太液芙蓉未
央柳もけにかよひたりしかたちをからめいたるよそひ
はうるわしうこそありけめありけぬなつかしうらうた
けなりしをおほしいつるに花とりのいろにもねにもよ
そふへき方そなきあさゆふのことくさにはねをならへ
枝をかさはさむと契らせ給しにかなはざりけるいのちの
ほとそつきせすうらめしき

絵に描け(きた)る楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆かぎりありければいとほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかさはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせず

らめしき。

〔河内本（＝尾州家本）の本文〕

ゑにかけるやうきひのかたちはいみじきゑしといへともふてかきりありければいとほひすくなしたいえきのふようもけにかよひたりしかたち・いろあひからめいたるよそひはうるわしうけふらにこそはありけめなつかしうらうたけなりしありさまはをみなへしの風になひきたるよりもなよひなでしこのつゆにぬれたるよりもらうたくなつかしかりしかたち・けはひをおほしいつるに花とりの色にもねにもよそふへき方そなきあさゆふのことくさにははねをならへえたをかはさんとちきらせ給したれもかなはさりけるいのちのほとそつきせすうらめしき

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆かぎりありければいとほひすくなし。太液芙蓉も、げにかよひたりし容貌・色あひ、唐めいたるよそひはうるわしう、けふらにこそはありけめ、なつかしうらうたげなりしありさまは、をみなへしの風になびきたるよりもなよび、撫子の露に濡れたるよりもらうたくなつかしかりし容貌・けはひを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさには、翼をな

らべ、枝をかはさんと契らせ給ひしに、誰もかなはざりける命のほどぞ尽きせすうらめしき。

〔別本（＝陽明文庫本）の本文〕

ゑにかきたるやうくゐひはいみじきゑしといへともふてかきりありければいとほひすくなしおはなの風になひきたるよりもなよひなでしこのつゆにぬれたるよりもなつかしかりしかたち・けはひをおほしいつるにはなとりのいろにもねにもよそふへきかたそなきあさゆふのことくさにははねをならへえたをかはさんとちきらせ給したれもかなはさりけるいのちのほとそつきせすうらめしき

絵に描きたる楊貴妃は、いみじき絵師といへども、筆かぎりありければいとほひすくなし。×××尾花の風になびきたるよりもなよび、撫子の露に濡れたるよりもなつかしかりし容貌・けはひを思ほし出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかはさんと契らせ給ひしに、誰もかなはざりける命のほどぞ尽きせすうらめしき。

明融本を除けば、河内本も別本も鎌倉期にさかのぼりうる伝本である。それぞれが植物のイメージを使いながら桐壺更衣の像を表現しようとして個性を示す箇所であるが、

河内本・別本が差異を見せつつも、波線をほどこした部分のように、巨視的には寄り添うと見なすことができるのに対して、定家本が独自色を出している。

明融本も定家本の名に恥じなければ、これも鎌倉にさかのぼりうる。いずれもほぼ同時代に行われた本文ということになる。とすれば、先の明石の巻の例に対して、野村精一が、

かくて、徒に一定の本文にこだわらず、一つの解釈にならずんで、読みの硬直化をひたすら志す、あれら近代的源氏学の志向の脆弱を嘆うかのごとき、中世人の、ある意味での「大らかさ」を復元する契機がここにはある。そのような局面から察するに、兼良の「人の所好にしたがふべし」の提言は、実は定家が「けしきはかり」の異文を採用する根拠としてこれを「源氏第一の詞」という評価を明示したことを紹介することとせ、その意味を明らかにさせようとした、という含みをもたせたものであったのだ……⁶⁾

と説くことがらは、この場面においても有効としなければならぬ。前記シンポジウムは、近現代において「権威」化された「青表紙本」⁷⁾定家本を相対化するイベントとなつたわけだが、翻つていえば、定家本あるいはそれを作り出した藤原定家という存在が「源氏と源氏以後」に屹立する

大きさを示したものに他ならない。

二 『狭衣物語』の場合

ここで話題を変えて、『狭衣物語』に転じてみよう。『さごろも』こそ、『源氏』につぎてはよをほへ（世覚え）はべれ（『無名草子』）といわれるように評価が高く、ひろく読まれた作品ではあるが、『源氏物語』における「青表紙本」のごとき「権威」ある本が整定されなかつた物語でもある。そのため、流布本に対するさまざまな異本が存在することはよく知られている。

実践女子大学は、当該物語研究のバイオニアともいうべき三谷栄一の在籍したところであり、本誌にも多くの論稿が寄せられている。氏の永年にわたる『狭衣』研究の集大成は『狭衣物語の研究』（笠間書院）二冊・A5版一〇六八頁に集約されているが、その圧倒的な質量は錯綜する諸本との格闘の記録といつてよい。

書誌学の解説書にも、その諸本について、つぎのような概観がされている。

『狭衣物語』、この異本の多い物語の伝本は、混合本を除けば、(A)岩波・日本古典文学大系に翻刻された系統、

(B)朝日・日本古典全書に翻刻された系統、(C)未刊国文

資料に翻刻された系統に三分される。三者は文章の表現においてはなほだしく異なっているが、注意すべきはストーリーは全く変わらないことである。三者の間には互いに関係があり、他本を座右に置いて、それを部分的に利用しつつ新しい本文を形成していったことは確かである。

右にあえて当該物語の解説を避けて引用したのは、一般論としての把握をしたためである。『狭衣』研究の前提としての認識をしめすものと見てよい。

稿者がかつて『源氏』『狭衣』の結尾を問題にした際、前者の比ではなく、後者の多様性にあらためて気づかされたことがあった。流布本『狭衣』巻四の大尾は、

たち返りをして過うきを見るべしなをやすらはん霧のまぎれに

と、ながめいらせたまへる御かたちの夕ばへ、猶いとかゝるためしはあらじとみえさせ給へるに、よとゝもに物をのみおぼして過給ひぬるこそ、いかなりける前の世のちぎりにかとみえ給へれ。(心也開板本)

となつてゐる。しかし、岩波古典大系の底本(内閣文庫本。平出本で校訂する)では、後文がつづき、

あはれにもおかしくも、わかき身のうへにて思しみにけることゝもをぞかたはしもかきをきためる。これは

はかぐしくゆへあることを。みぬ「かげのくち木」に(なりに——内閣文庫本欠)ければ、つゆばかりみどころあるべきやうもなきに。「たゞ、男のこゝろはかほる大将、かばねたづぬる三宮ばかりこそ、あはれにもめやすき御こゝろなめれ」と、からうじておもふたまへつれど、「おとこもおんなも、こゝろふかきこ」とはこのものがたりにはべる」とぞ、本に。

でようやく結末をむかえる。ところが、波線の箇所は諸本間で非常に異文の多いところで、

◆おとこも女も心なもこゝろふかきことはこのものかたりにはへるとそ本に (神宮文庫本)

◆おとこも女も心ふかき事は此物語にはへるとそほんに (龍谷大甲本)

◆おとこも女も心ふかき事はこの物語に侍るめりとそほんには見え侍るめる (蓮空本)

◆おとこも女も心ふかき事はこの御物語にはへるめりとそほんには見えはへるめり (鎌倉図書館本)

◆おとこも女も心ふかき事は此物語にはへるとそほんには見えはへる (為秀本)

◆おとこも女も心ふかき心はかりはこの物かたりに侍とそほんには見え侍ける (大島本)

◆をどこも女も心ふかきことわりハこの物かたりし侍り

とそまたある本にも侍りめる

(為明本)

◆おとこもをんなもふかきこゝろはかりはこのものかたりに
りにはへりとそほんには

(桂宮本)

◆おとこも女も心ふかき事ハかりはこのものかたりにあれと、
そもあまりすくなけなむとそしらせ給なめり。されとほのミし人のな
にハかりならぬ身に、ないかしろに心ちよけなりしか、にくかりしかはとそ

(紅梅文庫旧蔵本)

◆おとこも女も心ふかき事はかりはこの物かたりにあれと、
そもあまりすへなかめりとそしらせ給めり。されとほのみし人のな
きはかりならぬ身に、ないかしろに心ちよけなりしか、にくかりしかはとそ

(為定本)

◆おとこも女も心ふかきことはかりはこのものかたりにあれと、
そもあまりすくなけなむとそしらせ給ふなめり。されとほのみし人のな
にハかりならぬ身に、ないかしろに心ちよけなりしか、にくかりしかはとそ

(内海本・榊原本)

◆猶かくなから世いま、てありすくす存かけさりしさまの悦にて存さ
まなる人いま、又わくかたなうなりて見えきこえたてまつるハ、
我なからにて、つらき心の内をいかてしり給わん。いまはいと、
すてかたき御身の程、なりて、かのをなし身いやつしてたにきこへたて

まつらす、いく世あるへき身いもあらぬいなと、いと、おほしとちめぬるはいかなるへき事にやとそ

(京大五冊本)

と、分類を試みようにも収拾がつかない。したがって、この物語を相手にしようとする、いまのところ最新のテキストII新編日本古典文学全集の後藤祥子による「解説」にも、まず、『狭衣物語』の諸本に見られる本文異同の多様さは格別である」といわざるをえないというわけである。

この解説の文をつづけて引こう。「文単位、小節単位でかなり思い切った改変を行っている」という本文の現状認識があり、三谷栄一や中田剛直の諸本整理をふまえて、

……写本によって全四巻が等質に元本の性格を受け継ぐのではなく、巻毎に性格を異にし、あるいは巻の前半、後半で系統を異にするなど、一つの伝本内部に多系統の性格を併せ持つ場合が少なくないからである。加えて、親本に比定し得るような古伝本に完本が少ないことは、オリジナルの決定を困難にしている。書写・伝領の過程で他本とつきあわされた校合本文が、次の書写段階で恣意的に本文に取り込まれ、新たな混熊本文を生むのはよくあることだが、『狭衣物語』の場合、校合異本の欠落など何らかの理由によって、一伝本のなかで錯綜した異本関係を生じているのである。こう

した現象から私どもは、この物語特有の愛玩のされかたを窺うことができるであろう。欠落しながらも書写・校合され、不審箇所を多く散在させながら管々と読み継がれ、伝えられてきたこの物語は、学的権威に早くから支えられた『源氏物語』とは違って、中世の終りまで長いこと、一種特別な親しみやすさ、気安さを人々に感じさせてきたのに違いない。⁽¹⁰⁾

という。つまり、諸本に超越するような「権威」的本文の存しないのが『狭衣物語』なのだ、というのである。

『源氏物語』の成立当初から注釈や梗概の発生をうながす動きがあったようだ。そして国宝『源氏物語絵巻』徳川本・五島本のような美術・工芸への転化が図られるようになった、その蔭に「源氏以後」の世界があったのである。

後藤のいう、物語への「学的権威」は『源氏物語』に掬い取られ、『狭衣物語』などの「源氏以後」を支える物語たちには、注釈や梗概を発生させる機制が当初は呼び起こされることなかった、ということである。『夜の寢覚』は早い段階で大きな損傷を受け、『狭衣物語』の注釈は室町後期まで待たねばならなかった。

三 その他、平安時代成立の作品の場合

「定家本」の存否が作品の受容にどう影響するか。こういう命題を立ててみよう。その場合、「源氏と源氏以後」という物語史的状況のなかで、稿者がまっさきに想到するのが『夜の寢覚』である。

現在のところこの物語に「定家本」の存在は確認されていない。そのせいかあらぬか、前述のごとく、現存伝本はすべて大きな損傷を被っており、中間と末尾の欠巻部が研究の争点となっていることは周知であろう。それゆえ、伝後光厳院筆物語切一六葉、二五〇〇余字が確認できただけでも大きな収穫になりえたのである。

日記類も、御物本『更級日記』のような僥倖がのぞむべくもない『蜻蛉日記』『紫式部日記』等々、とくに前者の本文の様態は研究者を悩ませる問題であり続けている。

ここでは、『源氏』『狭衣』以外のおもな作品の伝本状況を、巷間流布のテキストの解説等から抜粋して一覽してみよう。

▼『古今和歌集』

伝本／……完本として現存しているものは、おおむね元永本・雅経本・清輔本・俊成本・定家本の五つの

系統に大きく分けられる。

元永本は、元永三年（一一三〇）の年記があり、現存の完本としては最も古い。平安時代後期に流布した系統の一本で、筋切本・唐紙卷子本などが近い。

雅経本は、……／清輔本は、……／俊成本は、……

定家本は、俊成本をもとに定家が校訂したものである。定家は、生涯にわたって、年記の分かる場合だけでも十回を越える書写・校訂を行っている。このうち代表的なものは、御子左家嫡流の二条家に用いられた貞応（二年七月）本と、その庶流の冷泉家に用いられた嘉祿（二年四月）本である。貞応本は、中世・近世・近現代を通じて最も流布したもので、梅沢本（日本古典文学大系で底本とした）、頓阿本などが伝わる。本書が底本とした為定本もこの系統のものである。……①

▼『後撰和歌集』

『後撰和歌集』の現存伝本を分類する場合、種々の分類が可能であるが、まず定家本系統と異本系統（非定家本系統）に大別するのが常識である。

藤原定家は、平安時代の古典作品をおびただしく書写し、加えて中世以後の歌学者達の定家崇拜のせいもあって、現在は彼の写した系統の本のみが数多く伝わっている状態になっているのであるが、『後撰集』

の場合においても、現存伝本のほとんどがこの定家書写本系統に属するのである。^②

▼『竹取物語』

平安時代の文学作品であるから、平安時代に読まれたままの形で今日に伝わっていると考えるならば、それは大きな誤りである。『宇津保物語』『落窪物語』などもそうだが、『竹取物語』の場合も、もつとも古い写本でも室町時代のごく末期、天正二十年（一五九二）の書写にかかる天理図書館所蔵の武藤元信氏旧蔵本が、完本としてはもつとも古いものである。しかし、この本にも、通行本一般に共通する脱落がすでに存しているほか、この本独自の誤写や、おそらくはこの本の書写者による本文校訂の跡もあって、現存諸本だけに限ってみても、絶対的位置に立つ本ではかならずしもない。

現存する『竹取物語』の伝本を大別すれば、通行本系統と古本系統に分けられるというのが常識である。^③

▼『大和物語』

……現存諸伝本をもととして、大和物語の伝本系統を大別すると、

第一類 現行流布の系統本（二条家本系統）

第二類 異本系統本 (六条家本系統)

となり、第一類は二条家を中心として定家・為家・為氏等の書写校合によつて、中世以降広く世に流布した系統本で、今日の伝本のほとんどはこの系統から派生したものである。……⁽¹⁴⁾

▼『蜻蛉日記』

本書の本文は、今日『蜻蛉日記』の最善本とされている宮内庁書陵部蔵の桂宮本によつた。しかし……善本とはいうものの書写は近世に入つてのものとなされ、誤字、脱字、脱落等についても、善本として他本を補い訂す面を少なからず持ちつつ、しかし、他本……によつて補い訂正されねばならぬ箇所も……相当数見出される。⁽¹⁵⁾

▼『紫式部日記』

定家は、他の多くの古典的作品におけると同様、紫式部日記についても、自筆または家伝の一本を所持していたであろうが、現存諸本の中には、かかる証跡ある伝本は見あたらない。現存諸本は……ことごとく伏見宮邦高親王御自筆本の系統のもののみで、おおむね近世中期以後の転写本である。しかも親王御自筆本は、現存しているかどうか、不明である。御自筆本もまた、式部自筆の原本の面影を、どの程度忠実に伝えている

ものか、不審が多ければかりでなく、現存末流写本に至つては、相互に混乱し、漸次不純の度を加え来たつてい⁽¹⁶⁾る。

ここにあげた選択は恣意的なもので、おもな作品を手近なテキストで覗き見たに過ぎない。しかし、それでも「定家本」の存在の大きさを測るのに打つてつけだろうと思つての所行である。

ここにはあげなかったが、『伊勢物語』における「定家本」の絶対的位置づけに対して、『平中物語』のような「権威」ある伝写を経なかつた物語が、偶然ともいふべき幸運を得てかろうじて孤本が残されたような事実。このような例を見ると、「定家本」の存否が作品の伝流・受容にどう影響するかという命題は、文学史上きわめて深刻な問題に逢着するのではないか。

『古今集』の定家本をめぐる議論ではあるが、浅田徹に示唆的な意見がある。

現在我々が古今集を読む際に一般に用いているのは藤原定家の校訂書写した系統の伝本である。鎌倉時代以来、歌道家証本として圧倒的な影響力を有してきたという事情のほか、これを越える優秀な本文を持つ伝本が見付かっていないことが何より大きな理由である。

しかし、定家本がそのように無理のない本文を伝え
ているのは、定家が古今集成立時の原本に近い優秀な
資料を得ていたからでは決してなかった。彼は手持ち
の不完全な資料群をもとに、よさそうな本文を適宜選
択していたのに過ぎなかったのである。¹⁷⁾

資料の博索が思うに任せぬ時代のことである。藤原定家
という存在が自己の言語感覚・文学意識・審美眼等々を駆
使してつくりあげた合理性の結果が「定家本」だったので
ある。ひとつひとつの作品ばかりでなく、もっと包括的に
「定家本」を分析する段階にわれわれはいるのではなから
うか。

四 「藤原定家」という存在

『源氏物語』に限らず、日本古典文学という世界におけ
る藤原定家という存在——延いては「定家本」というもの
を考える際、避けて通れないのが、定家個人の美意識（あ
るいは文体意識ともいべきか？ さらに前記の「言語
感覚・文学意識・審美眼……」をあげるべきか？）による
本文改変の問題である。

あからさまな改変の実例として残されているのが『土佐
日記』の場合である。紀貫之の原本が至近距離に推察しう

る希有な作品であることもあって、池田亀鑑『古典の批判
的処置に関する研究』（岩波書店、一九四一年二月刊）以
来、諸家の有力な論が多い。そこで別出されたのは、「読
み得ざる所々多し。ただ本に任せて書くなり（不読得所々
多只任本書也）」と奥書に書いた定家が、作品冒頭から「本」
のままでないことを露呈しているのである。

▼定家筆本『土佐日記』冒頭（尊経閣文庫蔵）
をともすといふ日記といふ物を、
むなもして心みむとてするなりそ

れのとし、はすのはつかあまりひとひ

のいぬの時にかとてすそのよしいさ、

▼為家筆本『土佐日記』冒頭（大阪青山大学蔵）

をともすなる日記といふものを

をむなもしてみんとてするなり

それのとしのしはすのはつかあま

りひとひのいぬのときにかとて

為家筆本は、昨年（二〇一四年）一〇月一日から一二
月七日まで東京国立博物館で開催された「日本国宝展」に
出品された。この本の存在が公表されてから外部に展示さ
れたのは初めてのことではなかったらうか。出展時、特に
奥書部分が披かれていたのが印象に強く残っている。

嘉禎二年八月廿九日以紀氏正本

書写之一字不違 不読得事

少々在之

権中納言(花押)

為家本の出現時、新聞・雜誌にはなやかに報道され、「為家本の完全な臨摹」⁽¹⁸⁾とされてきた青谿書屋本(東海大学図書館桃園文庫現蔵)の、まさしく親本であることが確認され、紀貫之の原本に肉薄しうる写本であることも伝えられた。と同時に定家筆本の古典書写の方法の一端が白日の下にさらされたのである。

さらに、別途、『更級日記』についても同様の可能性が指摘されるに至る。『更級日記』は定家本系統の本しか伝存していないため、比較するのが困難であったが、今井源衛の紹介になる『源氏』注釈書に、本文の断片でしかないけれども、比較してみるとつぎのようにあったのだ。

▼定家筆・御物本『更級日記』

てまつらむとて源氏の五十余巻ひつ

にいりなからさい とをきみ

せり河しら、あさうつなといふ物 (太字―横井)

▼島原松平文庫所蔵・了悟『光源氏物語本事』^{ほんのじ}

一 光源氏物語本事

・更級日記云^{にいひ}昔孝標女「ひかる源氏の物がたり五十四帖に譜くして」と有^{あり}。

・庭云、この五十四帖は本の帖数也。のちの人「桜人」さかの(嵯峨野)上下「すもり(菓守)」「さしぐし」「つりどの(釣殿)、尼」などいふ巻つくりそへて、六十帖にみてむといふ本意は、天台の解尺(釈)をおもはへたるにや。ただし此巻々、ことのほかにことばもいやしく歌もさまあし。弁乳母などのしわざとぞ申つたへ待る……⁽¹⁹⁾ (傍線・太字―横井)

『源氏物語』の受容史にかかせない菅原孝標女の証言であり、当然「源氏と源氏以後」においても貴重な資料ではあったのだが、異文ないし異本の存在が明らかにされると、定家本本文の信頼度が俄然問題視されることになった。『源氏物語』が当初は何巻だったのかという基本的かつ重要きわまりない問題に対して、定家筆本「源氏の五十余巻」は悩ましい表現であり、さまざまな議論を呼んできた。ところが、異本本文は「ひかる源氏の物がたり五十四帖」と明確であり、なおかつ「譜ぐ(具)して」というあらたな情報が追加されたのである。もちろん、この記事の信頼度、『光源氏物語本事』の情報の拠り所の信頼

度の問題が派生することはいうまでもないが。

前節末に浅田徹の言を引いたように、『古今集』に限らずどの作品であっても、定家は「優秀な本文を持つ伝本」だからといって、それを書写していたわけではない。資料・典籍の流通に制約のある時代ではあり、定家は、それこそ「手持ちの不完全な資料群」、身近なところから入手できる資料・写本を書写していたであろうことは、浅田のいうとおりであろう。そうした限界をかかえつつ、彼なりの合理性で「よさそうな本文を適宜選択していたのに過ぎなかった」というのは説得力のある見解である。

しかし、それにしても、以前から知られていたことではあるが、『土佐日記』『更級日記』のような実例は、単に定家の周辺の限界というものとは異なる問題であろう。くり返しになるけれども、藤原定家という存在、はたまた「定家本」という存在は、個々の作品のそれとは別に、包括的に検討し議論しなければならないのではなからうか。

注

- (1) 横井孝「夜の寝覚」末尾欠巻部復元の問題点——新出断簡分析の方法を模索して」、『実践国文学』第八六号、二〇一四年一〇月。
- (2) 佐々木孝浩「大島本源氏物語」に関する書誌学的考察」

『斯道文庫論集』第四一輯、二〇〇七年二月。のち『大島本源氏物語の再検討』（前掲）に修訂して収められた。

- (3) 伊井春樹「了俊筆『源氏物語』の本文と書入注の性格——付、伊予切拾遺」（初出一九八四年九月、『源氏物語論とその研究世界』風間書房、二〇〇二年一月刊、所収）、八五五頁。

(4) 横井孝「宇治十帖のうち第一の詞」——源氏物語における注釈世界」（日向一雅編『源氏物語 注釈史の世界』青簡舎、二〇一四年二月刊）、三九八頁。

(5) 横井孝「源氏物語の本文と表現——「大成」以後」と「阿部以後」の模索へ向けて」（横井・久下裕利編『源氏物語の新研究——本文と表現を考える』新典社、二〇〇八年一月刊、所収）。

(6) 野村精一「源氏物語」研究史の戦後（三）——本文を商品化するということ」（『実践国文学』第五四号、一九九八年一〇月）、三頁。

(7) 三谷栄一『狭衣物語の研究』（伝本系統論編）（笠間書院、二〇〇〇年二月刊）、『狭衣物語の研究』（異本文学論編）（笠間書院、二〇〇二年二月刊）。

(8) 橋本不美男「原典をめざして——古典文学のための書誌」（笠間書院、一九七四年七月刊）、一七五頁。

(9) 横井孝「物語・終焉のかたち——『狭衣物語』結尾の位

- 相」（実践女子大学文芸資料研究所編『物語史研究の方法と展望（論文篇）』実践女子大学文芸資料研究所電子叢書Ⅰ、一九九九年三月刊、所収。のち修訂し『狭衣』結尾の風景——物語・終焉の位相として』と改題して『源氏物語の風景』武蔵野書院、二〇一三年五月刊、所収。
- (10) 後藤祥子「解説／2『狭衣物語』の伝本について」（小学館・新編日本古典文学全集（上）、一九九九年一月刊、三二一～三二二頁。
- (11) 小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』（新日本古典文学大系・岩波書店、一九八九年二月刊）、四七七～四七八頁。
- (12) 片桐洋一『後撰集』の伝本』（『古今和歌集以後』笠間書院、二〇〇〇年一〇月刊）、一三二頁。
- (13) 片桐洋一校注・訳『竹取物語』（新編日本古典文学全集「解説」、小学館、一九九四年二月刊）。
- (14) 南波浩校注『大和物語』（『日本古典全書「解説」、朝日新聞社、一九六一年一〇月刊）、四〇頁。
- (15) 今西祐一郎校注『蜻蛉日記』（『歌・家集・蜻蛉日記』新日本古典文学大系・岩波、一九八九年一月刊）、五二五頁。
- (16) 池田亀鑑『紫式部日記』（『至文堂、一九六七年六月刊』、四頁。
- (17) 浅田徹「定家本とは何か」（『學燈社『国文学』第四〇巻第一〇号、一九九五年八月）、五五頁。
- (18) 池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』（岩波書店、一九四一・二刊）第一部「土左日記原典の批判的研究」、一四八頁。
- (19) 今井源衛『源氏物語の研究』（未来社、一九六二・七刊）、二九四～二九五頁。
- （よこい たかし・実践女子大学教授）